こども環境学会２０１５年大会（福島）
2015 年 4 月 24 日（金）～26 日（日）

報 告 書　（ 概 要 ）

【１】企画概要

■タイトル：こども環境学会２０１５年大会（福島）
■大会テーマ：「子どもが元気に育つ復興まちづくり」
■期日：平成 27 年 4 月 24 日（金）～26 日（日）
■会場：福島大学金谷川キャンパス、Ｌ講義棟およびM講義棟（〒960-1296　福島県福島市金谷川１番地）

■大会主旨・目的：

こども環境学会では、東日本大震災の発災以降、被災地におけるこども環境の復興支援に力を注いできました。2012年4月には、仙台市において、「復興再生：子どもの参画―こどもに優しいまちづくり」をテーマとして大会を開催し、復興において子どもの視点と子どもの参画が必要であることをアピールしました。

震災から4年が経過する2015年4月の福島大会では、「子どもが元気に育つ復興まちづくり」をテーマに、これまでの復興の歩みを再確認し、今後の復興への道筋を提案するものとしました。特に原発事故の影響を受けている福島県においてこの大会を開催することにより、被災地全般だけでなく、福島県の特殊性も踏まえた参加者の広い理解と今後の復興に向けた方向性の示唆することができたと考えています。

■参加者数：

大会参加者数合計 276 名
有料参加者　　167 名、招待 5 名、福島県民　大人 51 名、福島県民　こども 3 名、
ボランティア 19 名、報道 4 名、講師 27 名（会員除く）
交流会参加者　　92 名（有料 82 名、招待 10 名）
エクスカーション　　38 名
Ａコース有料参加者 22 名、コーディネーター2 名
Ｂコース有料参加者 13 名、コーディネーター1 名

■内容（概要）：

【4 月 24 日（金）】

◆エクスカーション：こどものための施設見学ツアー

A. ほうとく幼稚園園庭復興計画・Ｊヴィレジ・津波被害等の視察
B. PEP Kids Koriyama・本宮市スマイルキッズパーク等の屋内外遊び場・三春中学校の視察

【4 月 25 日（土）】

◆9:30 開会式、オープニングセレモニー

実行委員長あいさつ・大会趣旨説明：仙田満（東京工業大学 名誉教授）
知事ごあいさつ：内堀雅雄（福島県知事）代理 鈴木正晃（福島県副知事）
学長ごあいさつ：中井勝己（福島大学 学長）
会長あいさつ：小澤紀美子（東京学芸大学 名誉教授）

◆10:00　基調講演「こどもにやさしい復興まちづくり」

「保育の質」の視点から考える：大宮勇雄（福島大学 人間発達文化類学 教授）

被災地域での子どもの健やかな成長のために：佐藤滋（早稲田大学教授 元日本建築学会会長）

子どもと築く復興まちづくり協働プロジェクト：佐藤慎也（山形大学 地域教育文化学部 教授）

◆13:30　メインフォーラム「こどもにやさしいまちづくり―自治体首長の取り組み」

市長ごあいさつ：小林香（福島市長）

日本一の子育てしやすい環境づくりに向けて：尾形淳一（福島県保健福祉部こども未来局長）

みんなが誇れる県都ふくしまを創る―震災からの復興と未来を拓く街づくり：小林香（福島市長）

子どもの未来をひらく故郷いわきへ：清水敏男（いわき市長）

発電所立地大熊町の現況、そして未来：渡辺利綱（大熊町長）

村の想い、親の想い、そして私の想い：菅野典雄（飯舘村長）

福島大学災害ボランティアセンターの取り組み：鈴木典夫（福島大学 教授）

福島が拓く子どもの未来：中島興世（子育てと教育を考える首長の会 事務局長）

コーディネーター：仙田満

◆16:30　学会の震災支援活動報告：小澤紀美子

◆17:00　会員総会：2014 年度事業報告・決算報告、2015 年度事業計画・予算計画、社員選挙報告

◆18:00　懇親会

【4 月 26 日（日）】

◆9:30-12:00　分科会（４セッション）

１．子どもの遊び場とその充実

天野秀昭（大正大学 特命教授）

星野諭（コドモ・ワカモノ・まち ing 代表）

佐藤耕平（いいざかサポーターズクラブ 理事）

黍原豊（三陸ひとつなぎ自然学校 チーフマネージャー）

吉永真理（昭和薬科大学 教授）

２．福島の子どもたちを日本一元気に

原光彦（東京都立広尾病院 小児科部長）

中村和彦（山梨大学 教授）

宮島則子（前東京都荒川区立汐入小学校 主査栄養士、食育アドバイザー）

加藤篤　（NPO 法人日本トイレ研究所 代表理事）

神谷明宏（聖徳大学准教授）

菊池信太郎（菊池医院院長 小児科医）

３．新たな保育・教育の実践と環境

舟山千賀子（飯坂恵泉幼稚園 園長）

出原大（夢の鳥保育園 園長）

亀ヶ谷忠宏（宮前幼稚園 園長）

大澤力（東京家政大学 教授）

大宮勇雄（福島大学 教授）

新田新一郎（プランニング開 主宰）

生駒恭子（ほうとく幼稚園 副園長）

４．こどもが元気になる環境デザイン

阿部直人（ARCHI STUDIO/阿部直人建築研究所 代表）
山田亜希子（アリオスこどもプロジェクト遊び工房 代表）
菊川穣　（一般社団法人エル・システマジャパン 代表理事）
倉本信之（画家、幼少年造形教育実践者）
佐久間治（九州工業大学 教授）

◆13:00-15:00　ポスターセッション

Ａ．学術研究・調査活動：41 編
Ｂ．非営利団体の活動：4 編
Ｃ．企業等の活動：3 編
Ｄ．福島県民の活動：4 編

◆13:00-15:00 こども参加のワークショップ

Ａ．乳児とママの親子体操
ファシリテーター：ツインリンクもてぎハローウッズ 小瀧綾
Ｂ．「たのしー気持ち」に出会う遊びの時間！
ファシリテーター：あんどーなつこと安藤耕司
Ｃ．ふれあいあそびうたコンサート
ファシリテーター：プランニング開
Ｄ．昔（コマ回し・剣玉）遊びを楽しもう！
ファシリテーター：早川隆志
Ｅ．防災遊び～新聞紙や段ボール、レジ袋やＴシャツが大変身～
ファシリテーター：ＮＰＯ法人コドモ・ワカモノまち ing 星野諭

◆15:00 学会賞表彰式･受賞記念講演会

学会賞の授与：論文著作賞 1 件、論文奨励賞 1 件、デザイン賞 1 件、デザイン奨励賞 2 件、活動賞 2 件、活動奨励賞 1 件、合計 8 件
受賞記念講演
保育環境のデザイン：定行まり子（日本女子大学　教授）
認定こども園さざなみの森：竹原義二（無有建築工房）難波元實（さざなみの森園長）
復興に向け子どもたちが実現した児童館石巻市子どもセンター：
石巻市こどもまちづくりクラブ、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
子ども達が地域をつなぐ～被災地における子ども支援とコミュニティ形成：
黍原豊（釜援隊協議会、三陸ひとつなぎ自然学校

◆16:30-17:00　総括セッション／閉会
各セッションの報告
閉会のあいさつ：福島県、小澤紀美子、鈴木典夫、仙田満

■同時開催：こども参加プログラム「サンドアートフェスティバル」

福島県内において、遊びの重要性が見直されてきているなかで、砂遊びの魅力を親子で体験できる場を提供しました。参加費無料。
主催：福島市、共催：こども環境学会
会場：福島市四季の里　全天候型多目的スペース「農村いちば」
http://www.f-shikinosato.com/

■主催：公益社団法人 こども環境学会
■共催：福島県、福島市、福島大学
■後援：
いわき市、大熊町、飯舘村、楢葉町、三春町、三春町教育委員会、宮城県、岩手県
内閣府、国土交通省、文部科学省、厚生労働省、環境省、日本学術会議、科学技術振興機構、日本ユニセフ協会、日本ユネスコ協会連盟、日本建築学会、日本都市計画学会、日本造園学会、日本環境教育学会、日本発達心理学会、日本保育学会、日本体育学会、人間・環境学会、日本安全教育学会、日本感性工学会、日本小児保健協会、日本建築家協会、都市計画コンサルタント協会、日本公園施設業協会、日本公園緑地協会、公園財団、日本造園建設業協会、都市緑化機構、IPA 日本支部、チャイルドライン支援センター、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、聖徳大学、

■参加費等
大会参加費：正会員、団体会員：5,000 円(当日参加は、5,500 円)、学生会員、一般学生：3,000 円(当日参加は、3,500 円)、会員外（福島県民以外）：6,000 円（当日参加は 6,500 円）
※福島県民の参加費は免除。

■事務局：公益社団法人 こども環境学会事務局
〒106-0044 東京都港区東麻布 3-4-7 麻布第 1 コーポ 601
TEL: 03-6441-0564　FAX: 03-6441-0563
e-mail: info@children-env.org、URL: http://www.children-env.org/

福島民友新聞　2015 年 4 月 26 日

震災後の子育て 議論

こども環境学会 開幕

大宮教授ら基調講演

こども環境学会の2015年大会は25日、福島市の福島大で2日間の日程で始まった。専門家や県内自治体の首長らが参加、震災と原発事故からの復興を担う本県の子どもたちが元気に育つための環境づくりについて意見を交わした。

子どもが育つ環境づくりなどで県と協定を結んでいる同学会が、震災、原発事故後の本県の状況などを議論しようと開催。基調講演では、大宮勇雄同大人間発達文化学類教授（幼児教育・保育）らが県内の子どもたちの現状を報告した。

メーンフォーラムでは、小林香福島市長、清水敏男いわき市長、菅野典雄飯舘村長ら町長、菅野典雄飯舘村長らがパネリストを務めた。小林市長は「子どもたちの体力向上、学力向上に取り組みたい」、清水市長は「結婚や出産、子育てなどへの支援を市が担っていく」と今後の取り組みを紹介。菅野町長は「避難で多くの人にお世話になった子どもたちは、彼に立つ仕事に就きたいと話している」と相同を語り、菅野村長は「環境を整えるために頑張っていく」と決意を述べた。

26日は午前9時30分から、子どもの遊び場や生活習慣をテーマとした分科会を開く。

大宮勇雄福島大教授

保護者に応える支援

大宮教授講演要旨

原発事故直後は子どもたちは外での遊びを厳しく制限され、肥満率の上昇や体力・運動能力が低下傾向になるなどの問題を引き起こした。4年が経過して放射線量はだいぶ下がったが、少しでも被ばくを少なくしたいと考える保護者もいる。子どもたちが能動的に自然に関わり、自ら遊びたくなるような環境を確保するため、放射線量を実際に測定して保護者の心配に応える支援が必要だ。

テープカットでオープンを祝う関係者

常磐道 SA交流施設 開所

セデッテかしま 南相馬の拠点に

南相馬市が常磐道の南相馬鹿島サービスエリア（SA、同市鹿島区）に整備していたSA利活用拠点施設「セデッテかしま」が25日、オープンした。初日から多くの利用者が訪れ、にぎわいを見せた。

常磐道のほか、県道相馬流山線からも乗り入れが可能で、市は年間53万人の利用を見込んでいる。館内に広域観光ブースや食堂、地元産品を販売するスペースを設置。県内の常磐道に設けられた唯一のSAのため、市は情報発信や交流拠点としてSAを利用する長点となることを期待する。

開所式典では、桜井勝延市長が「南相馬や浜通り、福島の元気を発信する長点となることを期待する」とあいさつ。関係者がテープカットなどで待望の施設の開所を祝った。

年中無休で営業時間は午前8時～午後8時、食堂は午前11時～午後8時。

元気に砂遊び楽しむ

福島 きょうまで四季の里

こども環境学会の関連イベントとして、福島市の四季の里で25日、「サンドアートフェスティバル」が始まり、子どもたち（児童）に砂遊びを楽しんでいる。26日まで。

親子連れに伸び伸びと遊んでもらおうと、市が初めて企画。農村いちばに設けられた2824平方メートルの特設砂場には、砂遊びに適した栃倉町の川砂や、乳幼児が気軽に触れ合えるオーストラリアの「ホワイトサンド」を用意した。

会場では、砂像世界大会で優勝経験がある佐田裕之さんが世界遺産のモンサンミッシェルをモチーフにした砂像を制作しているほか、同志社女大の笠間浩幸教授が砂遊びの魅力を紹介している。

26日の開催時間は午前10時～午後3時。

砂遊びを楽しむ子どもたち＝25日、福島市・四季の里「農村いちば」

福島民報　2015 年 4 月 26 日

4/26 民報 2面

子育て、復興 意見交換

こども環境学会開幕 福島

子どもの成育と環境について研究する「こども環境学会」の20…

県内首長らが子育て支援などの取り組みや課題を語ったメーンフォーラム

…ども環境学会」の20…19年大会（福島大会）は二十五、二十六の両日、福島市の福島大で開かれている。本県で開催は初めてで、「子どもが元気に育つ復興まちづくり」がテーマ。初日のメーンフォーラムでは、県内の首長が子育て支援などの取り組みや課題を語った。

県、福島市などの共催。全国の大学、行政、教師・医療関係者らが参加している。

小林香福島市長、清水敏男いわき市長、渡辺利綱大熊町長、菅野典雄飯舘村長らがパネリストで登壇。このうち、渡辺町長は東京電力福島第一原発事故後の町の教育・子育て環境の変化などを報告しながら「まずは子ども達の笑顔を見届け、元気に暮らし、子どもたちに安心感を与えられるようにすることが大事」などと語った。福島大人間発達文化学類の大宮勇雄教授らが基調講演した。

最終日の二十六日は分科会などが開かれる。

橋葉北、南小 町内再開検討

渡町長 住民懇談会で示す

橋葉町はいわき市に隣接する市に十二年九月に編入。東日本大震災と東京電力福島第一原発事故で地区北、橋葉市の二小学校が閉校に追い込まれた。大和田昭司町長が二十五日、いわき市で開かれた住民懇談会で明らかにした。

橋葉中校舎は平成二十五年、県と復興連携協定を締結。子どもの遊び場サポート事業に協力・支援するなどしている。

同学会は平成二十五年、県と復興連携協定を締結。子どもの遊び場サポート事業に協力・支援するなどしている。

橋葉中の南校は数年後とみられている。

町教委は五月にも保

福島民友新聞　2015 年 4 月 27 日

こども環境学会

「成育環境 全国モデルに」

課題、分科会で意見交換

こども環境学会の2015年大会最終日は26日、福島市で遊び場や生活習慣などテーマごとの分科会を開いた。震災、原発事故で一時外遊びが厳しく制限され、体力・運動能力の低下が指摘されるなど、本県の子どもたちが抱える課題の解決に向け意見を交わした。

「福島の子どもたちを日本一元気に～元気な心と体を育む生活習慣の重要性」と題した分科会では、子どもの生活習慣や遊び、食生活、休せつのリズムについてそれぞれ専門家が発表した。

県光塩東京都立広尾病院小児科部長は、小児肥満が高血圧や動脈硬化を子どものうちから促進させることや、「自己像のゆがみ」やいじめなど心の問題にも発展することを指摘した。

また、「福島はもともと肥満の子が多かったが、震災、原発事故で日本一多くなってしまった。十分な睡眠など、良い生活習慣が子どもの肥満発生を減らす」と強調した。

分科会のコーディネーターを務めた菊池医院（郡山市）の菊池尊太郎院長は「子どもの肥満傾向なら放射線の『間接的影響』は今後も数十年単位で続く可能性がある。子どもの成育環境の再生が福島でうまくいけば、全国のモデルとなる」と思いを語った。

子どもの生活習慣をめぐり意見を交わした分科会

福島民友新聞　ジュニア情報　2015 年 5 月 2 日

13　ジュニア　7版　福島民友　2015年(平成27年)5月2日(土曜日)

みんゆう ジュニア情報局

今週の内容

14面 自然の宝物 チゴユリ
14面 わかる福島 あさか舞
14面 ニュースなぜなに アメリカとキューバ
15面 WeLoveスクール 藤町小(南相馬市)
15面 GOGOスポ少 鏡石MBboys(鏡石町)
15面 ニコ☆プチニュース
16面 よんじゃお！「どこにいるかわかるかな？」
16面 こどもエンタメ 超ミニスカでヒロイン
16面 銅像歴史さんぽ 豊臣秀次

サンドアートで何作る？

バケツで砂を型抜きしたり、シャベルやスコップを使って穴を掘ったり、お城やトンネル、大きな山などが自由に作れる砂遊びに挑戦してみよう。

砂を水でしめらせ、崩れないようにして作る砂の像は「サンドアート」と呼ばれ、気軽な芸術として親しまれています。

福島市で開かれたサンドアート作りのイベントには、世界大会で優勝したことがある佐田裕之さん（北海道）が登場。フランスにある修道院を、壁や屋根などの細かい部分まで再現した作品を作り上げ。見ている人たちを驚かせました。

来場した小学生たちも、福島町の川砂を使い、サンドアートを体験。木のこてを使って形を整えました。渡辺大和君（御山小3年）は「道具を使ってトンネルを作りました」と笑顔。久能愛斗君（大森小4年）は「お城を作るのが難しかったけど、集中して頑張りました」と話しました。

フランスの修道院を再現する佐田さん

一枚マンガの クールジャパン展 ―日本の良さ再発見!?

2015年 4月4日(土)▼6月14日(日)

クールな日本を風刺とユーモアで描く一枚マンガの世界へようこそ！

●出品作家

http://www.tokyo-np.co.jp/event/ky/manga/

日本新聞博物館 The Japan Newspaper Museum

福島民友新聞　2015 年 5 月 5 日

社説

ふくしまっ子

日本一元気な育ちの実現を

東日本大震災と東京電力福島第1原発事故からの復興を目指す本県にとって、子どもたちはかけがえのない「宝」だ。県が目標としている「日本一元気でたくましい子どもの育ちの実現」には、県民一人一人の協力が欠かせないことを、「こどもの日」にあたり確認しておきたい。

県は、新しい子育て支援計画「ふくしま新生子ども夢プラン」をスタートさせた。本年度から2019（平成31）年度までの5年計画で、県の子育て施策全般の基本方針となる。

少子高齢化の進行に加えて、原発事故の影響を受けた本県では、子どもを産み、育てやすい環境を取り戻すことが急務だ。

子ども夢プランでは、子育ての支援、子どもにやさしい環境づくり、子育てを支える社会環境づくりに加え、震災からの生活の回復と、安心して次世代を生み育てる環境づくりの合わせて五つを基本方針として掲げた。

地域や家庭環境などによって違いはあるが、県内の子どもたちの多くは、屋外活動への不安や避難生活を背景にして、運動能力や「心の健康度」の低下、肥満傾向などの問題に直面している。

先月、福島市で開かれた「こども環境学会」では、本県の子どもたちが抱える問題を踏まえ、「子どもの成育環境の再生がうまくいけば、全国のモデルになる」との前向きな発言が出席者からあった。

本県が子育てに関して取り組まなければならない課題は多々あるが、まずは本県特有の問題を直視して的確に施策を講じ、着実に実行していくことが重要だ。それが本県の将来を支える人材を育てていくための再出発点となることを銘記する必要がある。

子育て支援と言えば、一般的には保育に関わる事柄に関心がいきがちだ。しかし、実際には経済や医療の支援、労働環境、建物、交通網の整備など、さまざまな支援策が必要になることを認識したい。仕事と子育てを両立できる環境づくりには、企業サイドの応援態勢も欠かせない。

民間の全国調査によると、10年前と比べて、地域の中で、子どもを通した関わりを持っている人がさらに減り、家族以外で相談できる知人が少なくなっているという状況が明らかになった。県内でも都市部を中心に同様傾向だろう。

こうした状況では、疎外感が募り、子育ての楽しさも感じられなくなってしまう。不安を抱く親への声掛けや育児サークルへの支援の在り方など、地域でできる子育て支援も考えたい。

2015．5．5